

語り継ぐ若い世代

戦後70年の今年が暮れる。戦争体験を語る世代の人たちが少なくなるなか、非戦の思いを次世代に伝えようと、若い世代が様々な手法で継承に動き出している。

「描く生き抜く強さ」

戦後70年

今日さん漫画連載

戦況が悪化するなか、学徒隊の女学生が戦場に巻き込まれていく。漫画家、今日マチ子さんは2009年、コミック誌「エレガンスイプ」(秋田書店)で、戦争関連の連載を初めてスタートした。10年に単行本になった「cocoon」(秋田書店)だ。太平洋戦争末期の沖縄戦で多くの犠牲者を出した



①空襲の後②爆撃を受けた現場
＝いずれも漫画「cocoon」から
③今日マチ子(エレガンスイプ)

「ひめゆり学徒隊」に着想を得て、親友とともに戦場で生き抜こうとする少女たちを、ファンタジーのように描いた。最後は捕虜になった主人公が家族と再会する場面まで終わる。執筆を持ちかけたのは、戦争を体験していない同世代の編集者、金城小百合さん(32)。沖縄で生まれ、父の転勤で各地で育った。両親からよく沖縄戦の話や聞きたが、学校でその話は敬遠された。米軍基地を抱える沖縄の現状も、なかなか伝わらなかった。「本土の人に身近に感じてほしい」。編集者になつてそう考えていた時、目に留まったのが、女子高生を描いた今日さんの作品。「少女の目を通して描いてほしい」。08年、初対面で依頼した。「戦争ものは怖くて苦手だった」という今日さんは、戦争体験も沖縄との縁もない自分が描いていいのかとためらった。だが、金城さんと沖縄の戦跡を巡った際、「友だちが犠牲になつてしまったら」と考えた。描けそうな気がした。13年には劇団「マームとジブシー」が舞台化。今夏には沖縄公演も2回あり、盛大な拍手に包まれて終わった。今日さんは「cocoon」の後も「アンネの日記」に着想を得た「アノネ」(12・13年、秋田書店)、長崎原爆に着想を得た「はらいそ」(15年、秋田書店)など、次々に戦争関連の作品を発表。どれも主人公は少女だ。現地取材を重ねた上で創作すること。こだわるのは、欲や苦しさも含めて人物を描くこと。「戦争ものは、少女は純粋でかわいそうな存在として描かれがちだけど、生き抜こうという強さを描くことこそ、戦争に打ち勝つことなんじゃないかと」戦争体験のない自分が描くためには、次第に薄まった。「いろんな人が表現にかかわり、つながることが大事だと思うんです」(仲村和代)

証言集めネットで公開

「過去を知り政治に関わって」

「厳しいシベリアでの抑留生活を、こんなところで死ぬのかという思いで、生き延びました」。横浜市の成田富男さん(86)がカメラに向かって、淡々と話す。

14歳で満蒙開拓青少年義勇軍に志願。終戦3カ月前に満州に渡り、約3年間、シベリアなどで抑留生活を続けた経験を紙芝居にし、東京などで上演している。その体験を記録しようと、この秋、広告会社経営の両角慶太さん(40)＝東京都町田市＝が自宅を訪れた。

両角さんが証言集めを始めたきっかけは、昨年の武器輸出三原則撤廃などの政策転換で「戦争の影が見え始めた」と感じたことだ。戦争の実

相とは？ 具体的なイメージが湧かない。ならば体験を聞いて伝えよう、と考えた。今年2月、サイト「1945」(<http://ichikyuu-ongo.com>)を開設し、証言を無料公開している。

集まった証言は約20人分。「戦後70年を過ぎてもできるだけ続けたい」。戦争体験世代が減るなか、友人の脈や体験者からの紹介が頼りだ。「今のうちに、できるだけ多くの体験者の証言を共有できるようにしたい」という。

元中国新聞記者。親族がいる広島を訪れるたび、「平和」に関わりたい」と考えてきた。ラジオの特性を生かして肉声の記録を思いつき、一昨年からインタビューを開始。知人の紹介などで70・90代の25人の声を集めた。

戦後70年の節目。選挙権年齢が18歳以上に引き下げられ、安全保障関連法への意見も分かれる今、「若い人に聞いて欲しい。過去を知った上で政治に関わってほしい」と望む。(小川夢)



抑留体験者から当時の様子を聞く両角慶太さん(写真奥)
＝横浜市港北区



インタビューする早川洋平さん
＝東京都杉並区、早川さん提供